

# 体 育 科

体育科部 石塚 祐子 藤井 祐聖 栗原 和馬  
研究協力者 鬼澤 陽子

## 1 体育科における教科本質的な学びについて

「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を通して、運動やスポーツのもつ楽しさや喜びを実感する学び

体育科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は、運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上を果たす役割の視点から捉え、自己の適正等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けることである。この見方・考え方を踏まえ、体育科の教科本質的な学びを「『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方を通して、運動やスポーツのもつ楽しさや喜びを実感する学び」とした。

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」の育成のためには、体育科を学ぶ本質的な学びである「『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方を通して、運動やスポーツのもつ楽しさや喜びを実感する学び」が欠かせない。体育科の学びは、運動に取り組む中で、体力や技能の程度に関わらず、仲間と共に各種の運動の特性や魅力にふれることができる。そして、現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた楽しく明るいものにすることや、運動やスポーツが多様な人々を結び付けることは、自分の幸せだけでなく仲間の幸せに目を向けることにつながり、共によりよく生きていることができる生活を創造していくことができるからである。

## 2 研究の方向

体育科の教科本質的な学びは、「『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方を通して、運動やスポーツのもつ楽しさや喜びを実感する学び」である。この教科本質的な学びにおける他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、自分だけでは解決できない課題を解決したり、仲間と多様な関わり方をしたりすることで、自分や仲間の動きを高めるという意味をもつことができる。

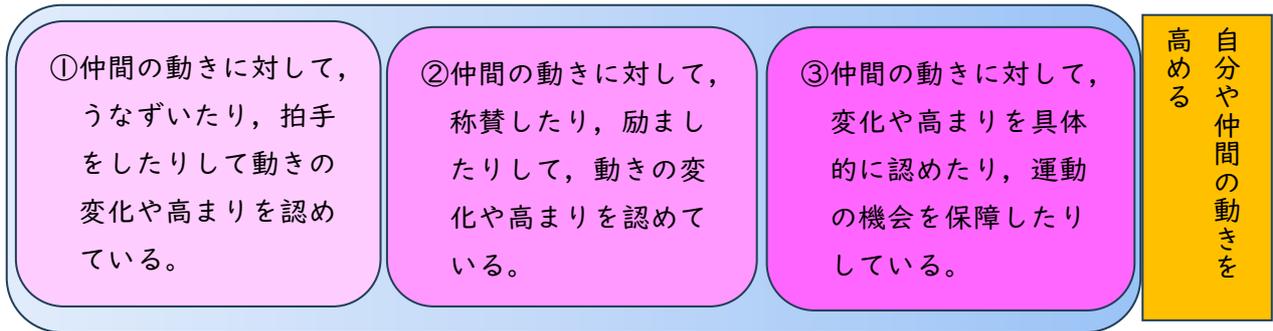
したがって、体育科の学びの中で、非認知能力である「他者と協働する力」は、自分や仲間の動きの高まりに向かって発揮される。

ここで、体育科の教科特性に着目すると、仲間と一緒に運動していても、自分の動きを変化させたり高めたりするために仲間の動きを見て、自分の動きに生かすことはある。しかし、自分の動きを変化させたり高めたりするだけになり、仲間の動きを高めるために、仲間の動きに応じた課題を見いだし伝えることができていない。子どもたちは、仲間の困り感に寄り添いたいという思いを高めることが必要になると考える。

そこで、子どもたちが、教科本質的な学びの中で、仲間と支え合い、自分や仲間の動きを変化させたり高めたりしようとする学びを実現し、「他者と協働する力」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

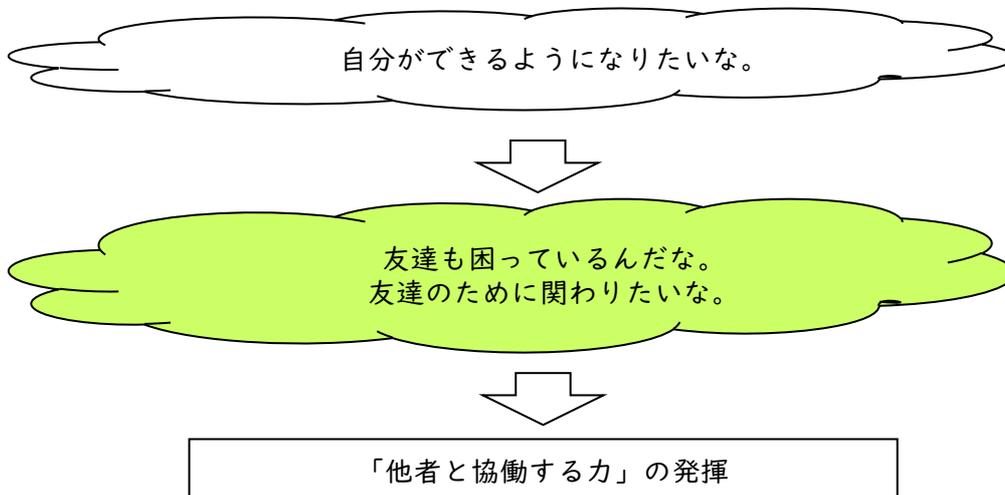
### 3 研究内容

#### (1) 「他者と協働する力」が発揮された姿



姿は、右の段階に行くほど他者と協働する意味に近付いている。これは、仲間の困り感に寄り添おうとして、仲間の動きをよく見ることで、動きの変化や高まりに気づき、それを認め、動きを高めることができるからである。体育科では、仲間とともに運動する中で、①の仲間の動きに対して、うなずいたり拍手をしたりして動きの変化や高まりを認めている姿は、仲間の動きの変化や高まりに気付いているが、言葉ではなく、行動で伝えている姿である。これは、仲間の動きを前の動きと比較して見ているからできることである。②の仲間の動きに対して、称賛したり励ましたりして動きの変化や高まりを認めている姿は、仲間の動きを認め、言葉で伝えている姿である。仲間のもう一度挑戦したいという思いを高めたり、繰り返し取り組むためのモチベーションを上げたりすることができる。③の仲間の動きに対して、動きの変化や高まりを具体的に認めたり、運動の機会を保障したりする姿とは、称賛したり励ましたりすることに加えて、仲間の動きの変化を見取り、その高まりを認めたり、仲間の動きをさらに高めようとしたりする姿である。変化や高まりを具体的に伝えているとは、手の位置や体の向きなど前の動きと比較し、高まりが見られた動きを認めていることである。また、運動の機会を保障するとは、解決策を伝えた後に、仲間がもう一度その運動をすることで解決策をすぐに動きに生かせるようにしていることである。これは、毎時間、運動の機会を保障するものではなく、単元の中で、チームやグループで練習する時間を設定した際に、行うことである。今まで取り組んできた仲間の動きを評価・判断し、解決策を伝えることに加えて、仲間の動きの変化や高まりを認めていることから、より「他者と協働する力」が発揮された姿であり、「支える」といった面での教科本質的な学びに近い姿である。

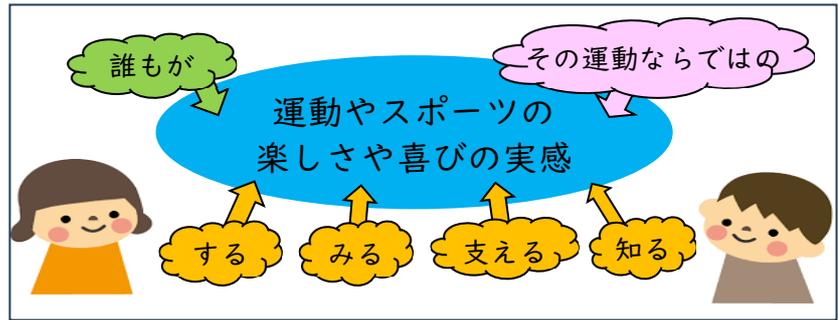
#### (2) 学びのプロセス



### (3) 学びのデザイン

#### ①教科の本質的な学び

体育科の教科本質的な学びを踏まえ、体育科を学ぶよさを子どもたちと単元の初めに共有する。体育科を学ぶ意義を子どもたちと『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方を通して、誰もが、その運動ならではの楽しさや喜びを実感することが体育科の学習で大切なことと



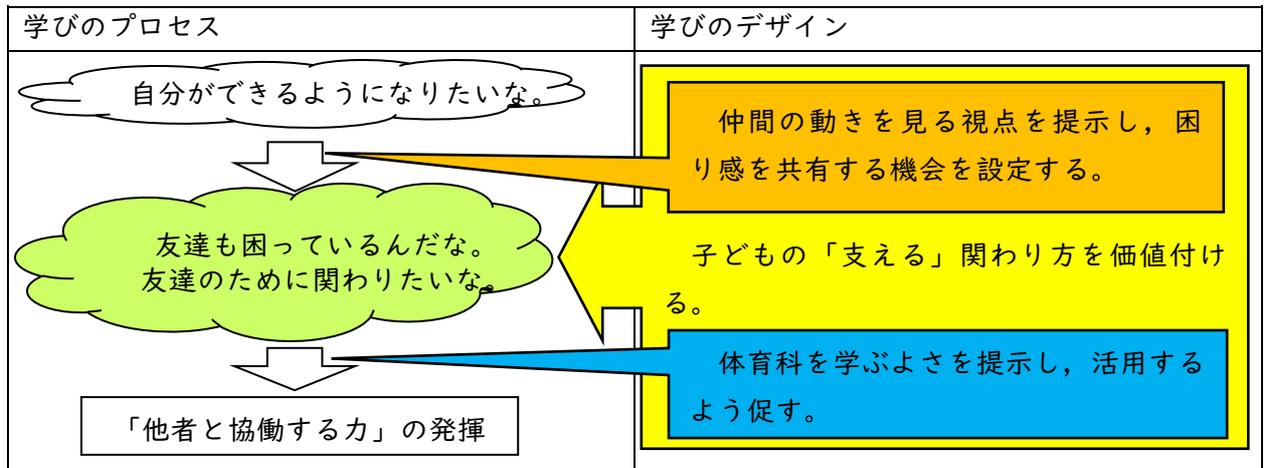
<図1 体育科を学ぶよさの図>

捉える。また、体育科における学びにおいて、一人だけでなく、ペアやグループの仲間と多様な関わり方をするすることで、他者と協働する必要感を実感することができる。そこで、自分の困り感に気づき、仲間と困り感を共有することや、仲間との多様な関わり方の具体を子どもと考えることを学習方略として捉えた。そして、体育科における協働的に学習する意味を自分や仲間の動きの高まりとして位置付けた。

特に、「支える」の多様な関わり方は、友達にアドバイスをする、褒める、励ます、助けるなどがある。しかし、実際に何をアドバイスするのかや、何をどのように褒めたり、励ましたりするのかがよく分からず、「する・みる・知る」の関わり方に比べて、「支える」は、子どもたちが進んで行くことができていない。そこで、「支える」の具体的な関わり方や声かけ、補助の仕方などを子どもたちと考えたり、教師が提示したりしていく。

また、この体育科を学ぶよさは、一単位時間の導入や活動の途中で触れ、本時で扱う運動の特性を多様な関わり方を通して学習するという見直しをもてるようにする。多様な関わり方をしたことで、自己や仲間の動きを変化させたり高めたりすることや、その動きの変化や高まった理由を振り返り、多様な関わり方を次の学びでも生かしていこうという思いをもてるように学習を進めていく。

#### ②プロセスを基にした学びのデザイン



仲間の動きの見る視点を提示し、困り感を共有する機会を設定する

仲間の困っている思いに気付くためには、仲間と困り感を共有することが大切である。困り感と

は、目標とする動きのイメージに対して、取り組んだ動きが近付かず、困難さを感じていることである。仲間の動きを見ているだけでは、自分が感じている困り感に気付くことは難しい。また、観察者が仲間の動きを見て感じる困難さと仲間の感じる困難さとは異なることがある。そのため、仲間の困り感を知るためには、仲間の動きを見る視点が必要となる。仲間の動きを見る視点を提示することで、うまくできていない状況をペアやグループなどで共有することで、仲間の困っている思いに気付くことができる。

また、一単位時間の学習において、前時の困り感から本時の課題を見だし、子どもたちの困り感を共有する。課題とは、本時に取り組みたい動きのことである。例えば、前転でまっすぐに回転したいが曲がってしまうという困り感を共有することで、課題を見出すことができる。器械運動や陸上運動などの動きを局面で表せる場合は、自分の課題を動きの連続図や写真、動画などに印をして掲示することで、いつでも確認できるようになる。ゲーム領域の場合は、発達段階に応じて、コート図に動きの導線を書いたり、自分が行いたいプレイを言葉や文字で伝えたりする。互いの課題を視覚化することで、仲間の動きを見る視点が絞られ、仲間の動きの高まりに気付きやすくなる。ゲームや表現運動などの動きを局面で表しにくい場合は、学級全体で課題を見だし、運動する中で仲間に伝える内容をチームやグループで共有する。例えば、表現運動で、集団で動きをつくる際に、タイミング（一緒に動く、ずらすなど）、メリハリ（緩急や強弱など）、隊形（広がるや集まるなど）をグループ内で伝える内容として共有する。

具体例 4年 「シュートプレルボール」

レシーバーを見ていてね。（「レシーバー体の向き」という見る視点を提示する。）



（レシーブをしたが、2人目にボールが渡らない様子の動画を視聴する）ボールは捕れるけれど、2人目にパスが繋がっていないな。



私たちのチームもつながらなかったよ。パスをつなげたいな。

子どもの「支える」関わり方を価値付ける

子どもが仲間の動きを支えたいという思いを高めるためには、練習や振り返りの場面において、教師は、子どもが仲間の動きに対して、「する・見る・支える・知る」の多様な関わり方の中の「支える」関わり方をしている姿を価値付けていくことが必要である。これは、子どもが「支える」関わり方をすると仲間の動きを変化させたり高めたりすることができる実感できるからである。子どもが仲間の動きの高まりに気付き、認めていたり、仲間の動きの高まらないときに前に取り組んだ動きと取り組んだ動きとを比較し、励まし褒めたりしている姿を見取るとよい。

そして、子どもが仲間に伝えていることに気付き、伝えられた子どもの変化を見取することで、その関わり方を価値付けていく。価値付けは、教師が称賛する中で、子どもの気付きが仲間により影響を与え、その結果、仲間の動きの高まりに繋がっていることを具体的に伝える。こうした教師の価値付けが学級全体に波及し、子どもは、「支える」関わり方のよさを実感できるようになる。

価値付けのタイミングは、練習やゲームの場面で以下のような会話が行われた際に行う。また、途

中で課題解決の経過を共有する場面や、振り返りの場面で、友達の関わりによって自分の動きが高まったことを記述や発言で振り返った際に、教師が練習中の具体的な関わりを紹介し、価値付けることも行っていく。

具体例 3年 「幅跳び」

 ○課題  
幅跳びの着地の場面で、両足着地ができるが、着地後、後方に倒れる。

 着地のときに、手を前に出すと、体が後ろに倒れないよ。次は、できるよ。

 手を前に出したが、後ろに倒れた。

 おっしい。でも、手は前に出していたから、体は前になっていたよ。

 ○○さんは、前の動きと比べて、友達のよくなったことに気付くことができたね。友達にできたことを認めてもらえるとうれしいね。

 私も友達のよくなったところを見つけて、伝えてみよう。

#### 4 成果と課題

本校体育科における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

##### ○成果

自分の動きを高めるだけになり、仲間の動きを高めるために、仲間の動きに応じた課題を見いだし伝えることができていない子どもは、仲間の動きの見る視点を提示し、自分の課題をペアやグループで共有することで、互いの動きを見合う必要感が生まれ、自分や仲間の課題を一緒に解決しようという思いをもつことができた。また、友達の関わりによって自分の動きが高まったことを記述や発言で振り返った際に、教師が練習中の具体的な関わりを紹介し、価値付けることで、関わりの具体的な方法を知ることができ、より仲間の困り感に寄り添い、支えたいという思いを高めることができた。

##### ○課題

教師による多様な関わり方の価値付けは、教師が見取った子どものよい関わり方をペアやチーム、グループに伝えるだけでなく、他の子どもたちに伝わるよう大きな声で伝えたり、活動途中や振り返りの際に全体に伝えたりすることが必要であると感じた。さらに、仲間の動きの変化や高まりを認めたり運動の機会を保障したりするためには、学習の中で、子どもたちが自分たちで取り組んだ動きを評価・判断して、練習内容や時間設定を工夫することも必要であると考えている。

#### 【参考文献・資料等】

- ・中山芳一（2023）『教師のための「非認知能力」の育て方』明治図書出版株式会社。
- ・鬼澤陽子（2024）『楽しい体育の授業』明治図書出版株式会社。